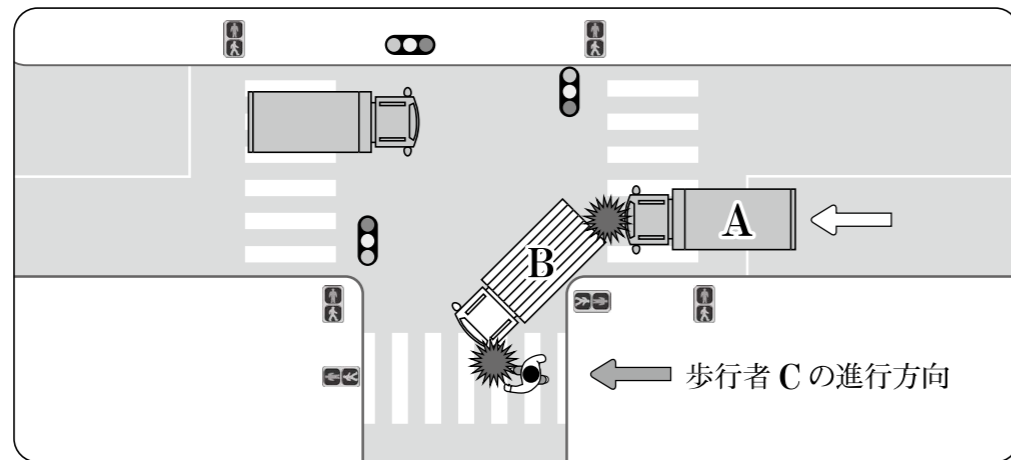


職場における交通安全指導

Part 124

交差点左折待ちの車両に追突



事故の概要

●事故の当事者

当事者A（中型貨物車）：40歳代、男性
 当事者B（普通貨物車）：30歳代、女性
 当事者C（歩行者）：70歳代、男性

●被害状況

A：車両前部凹損
 B：軽傷（頸椎捻挫）
 車両後部凹損
 C：重傷（頭部挫傷、全身打撲）

●道路状況

片側一車線の県道

事故状況

横浜市内の運送会社に勤務して20年になるAは、中型貨物車の乗務経験が豊富なベテランドライバーである。

事故当日は、日用雑貨品等を県内のスーパーマーケットに配送している途中で、最初の納品を終え、次の店舗に向かうため県道を走行していたところだった。

Aは青信号に従い交差点を前車の普通貨物車Bに追従して左折しようとしていた。Bは、横断

歩道を歩行者Cが横断して来たことを認め停車した。

Aは、Bが停車したことに気付くのが遅れ、急ブレーキを掛けたが間に合わずBに追突。

Bは、そのはずみでCに衝突して転倒させ重傷を負わせた。

事故の原因

今回の事故の原因は、停止した前車に気付くのが遅れてしまった漫然運転による前方不注意ですが、その背景には、前夜、子供の教育方針をめぐって妻と口論になり、工作中ずっと頭から離れなかったことがあげられます。

安全指導

悩み事がある時や長時間の運転をしていると、次第に運転以外のことを考えたりすることがあります。

顔は前方を見ているのに頭はボーッとし、注意力がなく意識が散漫としている状態のため、ほかの車両や歩行者の存在に気付かないことがあります。

この状態を「漫然運転」と呼びます。

●漫然運転の原因と防止策

① 考え事をしながらの運転に注意

考え事をしながら運転していると前方の状況が目に入らず、顔は前を向いていても実は見えていないという状態になりがちで、赤信号を見落したり、歩行者の発見が遅れるなどの危険な状態に陥りやすくなります。

運転中は、運転以外のことに気を取られることなく、運転に集中しましょう。

② 慣れと過信に注意

初めて運転免許を取得した頃は、緊張しながら運転しますが、慣れてくるにつれて緊張が緩み、特に乗務経験の長いベテランドライバーは、通り慣れた道路やいつも出入りする構内では、油断が生じやすくなります。

運転に慣れるほど「あそこは大丈夫。」「この路地からは人は出てこないはず。」という「だるう運転」になりがちです。

「もしかしたら車の陰から人が飛び出してくる。」「交差点で前車が急停止する。」というように「かもしれない運転」を心掛けましょう。

③ 「ぼんやり」運転に注意

絶えず周囲の状況に目を配り、他車や歩行者の動きを予測し、瞬時的に確かな判断や操作が要求される運転時において、ぼんやりした状態で走行するのは非常に危険です。

「ぼんやり」を招く要因の一つとして、睡眠不足や疲労などが考えられます。

運転中に少しでも眠気や疲れを感じたら、車両を安全な場所に停車して休憩をとりましょう。

可能であれば仮眠をとり、仮眠直後には、車外に出て、軽く体を動かしたり、洗顔したりして、頭も体も眠気を覚ましてから、運転を再開しましょう。

④ 単調な道路、長時間運転に注意

走行車両が少ない高速道路や海岸線のように

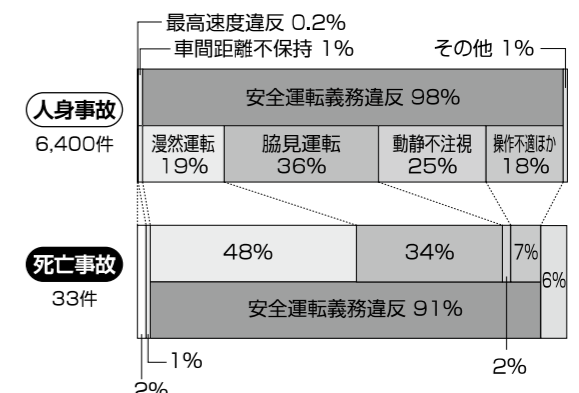
延々と真っすぐな道が続くなど、単調な道路を長時間運転していると、ハンドル操作が少なく、運転中の確認事項も少ないことから緊張感が薄れ、頭が「ぼんやり」とし、このまま運転していても、前方は安全だと思い込みやすくなります。

運転の途中に休憩をとったり、ガム等を噛んで脳を活性化するなど、リフレッシュすることにより、気分だけでなく運転のリズムも変わってきます。

運転中にお気に入りの音楽を聴きながらリラックスをして運転するのも効果的です。

追突事故の違反種別発生状況

●死亡事故の48%は漫然運転が原因



■公益法人交通事故総合分析センターの統計データによる全国・平成29年～令和元年の平均概数
 ■事業用トラックが第一当事者になった自動車・原付との事故
 ■トラック・軽貨物・ワンボックス・ライトバンを除く貨物車、トレーラ

今回のケースは、「漫然運転」が原因となった事故でした。

運転中は、油断せず、前方に対する警戒心を高め、危険意識を保つことが大切です。

常に前車が止まるかもしれないという「かもしれない運転」の心構えと、確実な安全確認の方法として、運転中に「左折、前車、注意！」と自ら声を出して行う「コメンタリー運転」を実践し、交通事故の根絶に努めましょう。